

校長室だより～和光高校今昔 第2号 H26. 5. 21

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

午王山（ごぼうやま）にまつわる話

学校の玄関には、部活動などの活躍で得たトロフィーや賞状が多く飾られています。その中に消防署から頂いた感謝状があります。平成25年3月、学校南側の午王山の火事消火に本校生徒が寄与したもので、新聞でも大きく報道されました。荒川の沃野にひととき目立つ広葉樹林の台地について紹介していきます。



学校周辺には、主に根菜類を中心とした畑が広がり、開校当時から緑豊かな田園風景を醸し出しています。そのような風景の中で異彩をはなっているのが「午王山」です。地質を探るとその歴史はなんと15万年前にさかのぼり、20mほどの小高い丘は、荒川の流れと氾濫原をずっと見守ってきたこととなります。平成2年の理科教諭保科裕先生の研究で、この歴史が明らかになりました。解明の鍵は「ガケ」にあったようです。



「ガケ」からは地層が観察されます。当然ですが地層は下の方が古いものです。最下層部には、海にたまった泥と砂の地層が見られます。この地層からは沢山の巣穴化石が採掘されています。これは、シャコやカニなどが住んでいた巣穴と考えられます。またやや上部には貝化石も見つけることができます。つまり約15万年前はここは海だったのです。

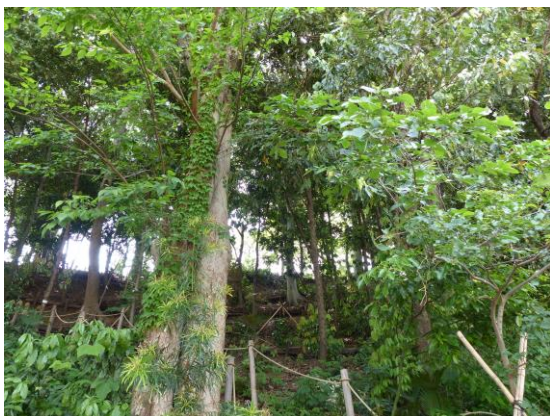
やがて荒川や利根川が土砂を運搬・堆積し、関東平野が形成されてきます。地層では砂や礫（細かい石）が堆積しています。同時に氷河期最盛期となり海が退いて行ったことと重なり「武蔵野レキ層」が完成します。およそ6～8万年前のことと考えられています。

次に見ることのできる地層は「関東ローム層」



です。いわゆる赤土ですが、これは2～6万年前の富士山や箱根の山などが噴火して降り積もった火山灰です。およそ10m位火山灰が大地を覆ったといわれています。

さて、いよいよ午王山が誕生したのが2万年前のことです。この時期はウルム氷期といわれ氷河期の中でも急激に気温が下がった時期です。なぜ寒くなると海面が下がり陸地が増えるのでしょうか。現代社会で深刻な課題となっている地球温暖化とそのことに伴い訪れるツバルやフィジーなどの海に水没する国家の問題とちょうど反対の事態が起きました。つまり、海水→蒸発→雲→雨→河川→海という地球上の水のサイクルの過程で、気温の低下により雨が雪となって地上に降り、それが氷河となって再び海には戻らないことで海面が下がり今まで海底であった場所が陸地になるのです。このあたりでも川は平らであった大地を急激に刻み、グランドキャニオンのような景色に一変させたのです。この刻み残された一つの丘が午王山の原型です。



今から5000年ほど前から氷河時代も終わりをつけ、気候も温暖になってきました。実はこの時代は、現代よりも地球規模で気温が高かったため海面が上がり海洋面積が今より

も大きかったのです。再び海面下に潜った和光の地でしたが、同時に午王山は海に浮かぶ小さな島となり、当時居住していた縄文人は貝を採り、魚を獲っていたでしょう。午王山の山頂には古墳時代にかけての住居跡の遺跡も見つかっています。この海に堆積した土壌が和光高校の地面を作っているのです。

その後徐々に気温が下がり現在に至るわけですが、大地の営みには壮大な歴史がありこれから先の時代では常に、開発と自然保護・歴史保護の調和が必要であることを示してくれています。



和光高校では生徒会と生物部などが中心となって「午王山ボランティアの会」を運営しています。草刈りやゴミ拾いなどを行うとともに植物の観察や遺跡の調査を行い、地域の歴史保存に貢献しています。その様子はあらためて紹介します。